

勢多だより

SETA DAYORI

No. 108
2018年1月



第43回「若鮎祭」を終えて

第69回 西日本医科学学生総合体育大会

新任教員紹介

海外自主研修

リレー・フォー・ライフ

平成29年度 若鮎祭特集



滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

【メインテーマ】平成29年度若鮎祭特集

トピックス

- 01 第43回「若鮎祭」を終えて 実行委員会委員長 赤井 奎太
- 02 「若鮎祭」実行委員の感想
- 04 平成29年度 学生表彰
- 05 第43回若鮎祭収支決算報告

新任教員紹介

- | | |
|--------------------------|-------------|
| 06 基礎看護学講座(生化・栄養) | 教授 佐々木 雅 也 |
| 07 小児科学講座 | 准教授 多 賀 崇 |
| 08 医療安全管理部 | 准教授 伊 藤 英 樹 |
| 09 基礎看護学講座(基礎) | 准教授 中 西 京 子 |
| 10 外科学講座(消化器外科) | 准教授 清 水 智 治 |
| 11 地域医療教育研究拠点(JCHO 滋賀病院) | 准教授 中 島 滋 美 |
| 12 リハビリテーション部 | 准教授 児 玉 成 人 |
| 13 内科学講座(血液内科) | 准教授 木 藤 克 之 |

キャンパスライフ

- 14 海外自主研修
 - オーストラリアの海外自主研修を通して 医学科 第4学年 川 崎 翠
 - テンブル大学での自主研修を終えて 医学科 第4学年 生 野 泰 彬
 - ドイツでの自主研修を終えて 医学科 第4学年 木 内 亮 平
 - マレーシア国民大学での研修を通して 看護学科第4学年 齊 藤 美 祐
- 22 リレー・フォー・ライフ(RFL)
- 24 滋賀医大病院サマーコンサート
- 25 第69回 西日本医科学生総合体育大会
- 26 研究医コースのご案内

図書館からのお知らせ

- 28 Library Book Bazaar を開催しました!!

JCHO 滋賀病院だより

- 30 外科部門の紹介
- 31 循環器内科の紹介

インフォメーション

- 32 平成29年度 大学院学位授与式
- 33 平成29年度 医学科第2年次後期学士編入学並びに秋季大学院 入学宣誓式
- 36 第43回 解剖体慰霊式・平成29年度 研究動物慰霊式

トピックス

Topics

第43回「若鮎祭」を終えて

第43回若鮎祭実行委員会委員長
医学科第4学年
赤井 奎太



今年も学祭が終わりました。参加した人たちや、準備をした人たちにとって、喜怒哀楽の思い出の1ページになっていれば嬉しいです。

僕はボート部に主に所属していて、秋には僕らの練習する瀬田川は波、風が少なく特に穏やかになります。周りの水と空気も冷たく澄んでいて、紅葉の景色に囲まれながら幅60センチほどの艇が水の上をすべる感覚はとても気持ちがいいです。水と艇の感覚、クルーの声、熱いハート、きつい練習、西医体優勝、マネさんの朝ごはん、艇庫に響く部員の声、瀬田川の景色、僕の大学時代の宝物です。

学内での挨拶回りの際によく「今年の学祭の目玉は何なのか」と聞かれたのですが、一度もうまく答えられなかったのが残念です。今年の若鮎祭の目玉は複眼で、一つ一つの企画や講演が、大きいもの小さいもの問わず素晴らしいもので構成されていて、今年のなにか一つを決めるのは難しかったです。強いて言えば今年の目玉は台風でした。

特定の目玉はないと言っても、自分の中では、前夜祭のオープニングくらいは是非何かしら派手にしたいと思っていました。というのも委員長が属する執行部の役目は、実行委員の配置、あいさつ回りや、寄付金集め、各局をまとめたり、飲酒喫煙禁止の喚起をしたり、ステージの垂れ幕を作ったり、学祭の後片付けをしたりなどだったので、いわば若鮎祭の縁の下の力持

ちです。せっかく委員長なのに…ということで、パフォーマンスをいくつか考えました。主にバンド演奏などを全力で行うことになりましたが、高校以来のオープニングライブのステージは最高で、それまでの苦労はズボンとシャツと共に飛んでいきました。

実行委員の皆さんお疲れ様でした。実行委員会のメンバーもありがとう！台風に惑わされて、色々もめることもありましたが仕方がないです。雨風に打たれながらも最後まで若鮎祭をやりきった僕らの勝利です。

第43回若鮎祭にご協力、ご支援いただいた皆様本当にありがとうございました。

来年度若鮎祭もよろしくお願いたします。



「若鮎祭」実行委員の感想

ステージ局長 医学科第3学年 大井 舜也

私はステージ局長として若鮎祭の運営に関わらせていただきました。まずは若鮎祭のステージ企画を一緒に作り上げ盛り上げてくれた多くの方々に感謝を申し上げます。今年の若鮎祭のテーマは「ええねん」であり、各々が個性を出して例年にならぬ若鮎祭にしていきたいという思いで私はこの若鮎祭へと取り組んでいました。ステージ局長という仕事は裏方で、各班がスムーズに仕事ができるように外から様子を見ていましたが、苦労の中にも楽しそうに仲間とともに若鮎祭を作り上げていく班員の姿が私は頼もしくて仕方がありませんでした。絶対に楽しい学祭になると確信していましたが、あいにくの天候でステージ企画を体育館で行うことになり、計画していた企画を短くしたり無くしたりと十全に行うことができませんでした。ステージ上でのイベントを準備してくれていた各部活や局員には非常に申し訳ない気持ちでした。「台風さえ来なければ…」という思いもありましたが、それでもすべての企画が終わったときの達成感はひとしおでした。

今後の若鮎祭もこのような気持ちを与えてくれる素晴らしいものであることを願っています。

企画局長 医学科第4学年 亀田 貴範

企画局では、学生・医療関係者のみならず地域の方々や小さなお子さんなど幅広い層に向けての企画を行いました。今年度は例年の企画を踏襲しつつ、自分たちで話し合い、よりよい形になるよう試行錯誤しました。そして運営していくうえで、皆様のご協力があった初めて成り立つ局だと再認識しました。この場を借りて、ご協力いただいた外部の企業や団体の方々、学内の先生方と実行委員のみなさんに感謝いたします。

当日に参加者の方々が楽しんでいる様子を見て安堵感と充実感を覚えました。今年度は台風の影響もあり当日実施できなかった企画も多くあり、そこだけが唯一心残りなので、来年以降は晴天にも恵まれ、より良い企画が実施されることを願っています。

広告局長 医学科第4学年 平田 詞子

今年も多くの広告主様のご協力のもとに学園祭を行うことが出来ました。この場を借りて感謝を申し上げます。

局長としての仕事は、当初の想像をはるかに越えて大変なものでした。広告局としての仕事を始めた五月頃はわからないことも多く、私が本当に局長をつとめていていいのだろうかと不安に思うこともありまし

た。しかし、班長をはじめとする局員たちや、例年必ず広告を出してくださる広告主様、今年から新たにご協力くださった広告主様など、さまざまな方の支えがあり、無事若鮎祭を終えることができ、今は達成感でいっぱいです。局長としてつたないところも多々あったと思いますが、ここまでやって来られたのは、広告局にご協力いただいたみなさまのおかげです。本当にありがとうございました。

来年の若鮎祭の成功を祈っています。

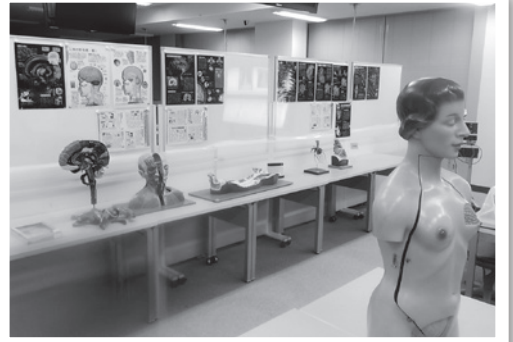
広報局長 医学科第4学年 村石 宇内

実習中、実験機器の前にできた長蛇の列に並んでいる時に不意に声を掛けられて、二つ返事で気軽に引き受けたのが局長としてのスタートでした。それから10か月が経ち、若鮎祭も無事に終わりました。広報局の仕事を振り返ってみると、どんなものでも局員に助けられることが多かったようにも思います。作業が集中しそうな時には分散するように手伝ってくれたり、皆が積極的に関わってくれたおかげで協力的な雰囲気が出て、作業の負担も減ったように感じました。普段はわからない彼ら彼女らの素晴らしい面を見ることができて頼もしく感じ、一緒に仕事ができただけうれしく思いました。また、仕事の報告を受ける度に、みんなの地道な作業で全体の仕事が出来ていくのを感じることができました。

広報局員、実行委員会のメンバー、学生課の方を始め、いろいろな方に協力してもらい、やり遂げることが出来ました。本当にありがとうございました。

総務局長 医学科第4学年 木内 亮平

私は、今年の1月からの約10ヵ月間、総務局長として若鮎祭の運営に携わらせていただきました。今年の若鮎祭は台風が接近する中での開催となり、実行委員の幹部として不手際も多く、皆様に多大なご迷惑をかけたと存じます。そんな中でも、最後まで総務局の仕事を全うする事ができましたのは、優秀な副局長・班長・班員の皆様のおかげであると強く感じます。このような素晴らしい仲間と一緒に働く事ができたことに深く感謝します。そして総務局での仕事を通して、学内学外問わず、本当にたくさんの地域の方々にご支援・ご協力をいただくことによって、若鮎祭を行うことができていますと実感しました。改めまして、若鮎祭の開催のためにご尽力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

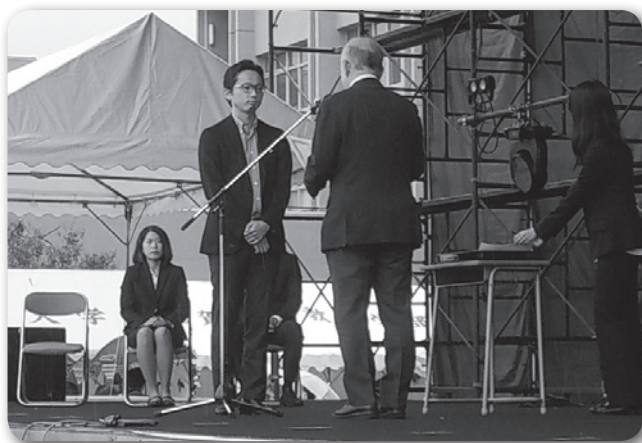


平成29年度 学生表彰

10月28日(土)、第43回若鮎祭開会式終了後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式が挙行されました。

今回表彰を受けたのは、平成28年9月から平成29年8月までの間に優れた実績、評価を得た3人です。受賞者には塩田学長から表彰状と副賞の目録が授与され、受賞者への祝辞が述べられました。

受賞者	受賞理由
陸上競技部 医学科 第4学年 大沼 玲佳	第69回西日本医科学生総合体育大会陸上競技部門女子ハンマー投げにおいて優勝した。
医学科 第4学年 高畑 翔吾	研究医として、神経難病の基礎研究に取り組み、Experimental Neurology (I.F.4,657) に共著者として発表し、また成果の一部を第122回日本解剖学会総会・全国学術大会で筆頭演者として発表した。加えて、官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム～の7期生に採択された。
医学科 第6学年 竹田 有沙 (欠席につき代理授与)	71体の法医解剖に参加し、解剖認定医と遜色ない技術を身に付けた他、6回の学会発表(うち5回筆頭演者)や2本の自署筆頭論文の執筆等、優れた研究業績を残した。



第43回若鮎祭収支決算報告

若鮎祭 実行委員会

【収入】

(単位:円)

局	項目	金額	各局合計金額
執行部	近江八幡市蒲生郡医師会	¥10,000	¥4,899,000
	大津市医師会	¥50,000	
	守山野洲医師会	¥20,000	
	甲賀湖南医師会	¥10,000	
	草津栗東医師会	¥30,000	
	東近江医師会	¥10,000	
	湖北医師会	¥10,000	
	高島市医師会	¥10,000	
	彦根医師会	¥10,000	
	滋賀県医師会	¥50,000	
	和仁会	¥200,000	
	滋賀医科大学医学科後援会	¥300,000	
	滋賀医科大学看護科後援会	¥100,000	
	滋賀医科大学同窓会「湖医会」	¥200,000	
	滋賀医科大学医師会	¥60,000	
	学内寄付	¥943,000	
	学生自治会費	¥1,600,000	
	滋賀医科大学体育会費	¥1,000,000	
	滋賀医科大学文化祭費	¥270,000	
	医師会シンポジウム	¥16,000	
総務局	模擬店出店料	¥372,100	¥372,100
広告局	パンフレット広告掲載料	¥2,503,460	¥2,503,460
広報局	学祭パーカー売上げ	¥1,353,000	¥1,353,000
企画局	縁日売上	¥29,295	¥40,195
	その他企画	¥10,900	
合計			¥9,167,755
前年度繰越金			¥3,408,516
総計			¥12,576,271

【支出】

(単位:円)

局	項目	金額	各局合計金額		
執行部	保険料	¥25,411	¥258,609		
	郵送・通信	¥7,200			
	文具・事務用品・コピー	¥55,305			
	執行部企画	¥135,213			
	クリーニング費	¥24,300			
	交通費	¥11,180			
	総務局	文具・事務用品・コピー		¥11,592	¥139,572
	衛生関連	¥92,244			
	物品・設備	¥35,736			
広告局	文具・事務用品・コピー	¥19,799	¥179,206		
	郵送・通信	¥151,687			
	交通費	¥1,240			
広報局	振込手数料	¥6,480	¥1,793,494		
	文具・事務用品・コピー	¥64,226			
	学祭パーカー	¥870,190			
	パンフレット	¥744,184			
企画局	学祭 PR 活動	¥84,622	¥678,311		
	看板作製	¥30,272			
	文具・事務用品・コピー	¥3,476			
	イベント(食堂)	¥31,400			
	イベント(屋外)	¥193,676			
ステージ局	イベント(講演会)	¥370,877	¥6,882,163		
	イベント(CMC・講義室)	¥22,483			
	イベント(体育館)	¥28,451			
	お弁当	¥27,948			
	文具・事務用品・コピー	¥963			
	ステージ設営	¥2,484,000			
その他	電気工事費	¥648,000	¥9,931,355		
	電気燃料費	¥78,200			
	映像班	¥45,190			
	フィナーレ班	¥1,880,068			
	交渉班(接待費)	¥11,043			
	お弁当	¥46,908			
	吉本芸人・ケイト関連	¥1,400,000			
	ミスコン	¥50,997			
	スイッチャー・PINマイク	¥124,200			
	カレンダー・花束	¥23,240			
	振込手数料	¥4,968			
	KOE・その他企画	¥84,386			
	合計			¥9,931,355	
	次年度繰越金			¥2,644,916	
総計			¥12,576,271		

新任教員紹介

New
teacher
introduction

基礎看護学講座 (生化・栄養)



教授 佐々木 雅也

2017年6月1日付けで、看護学科基礎看護学講座(生化・栄養)の教授に就任いたしました。この場をお借りしてご挨拶させていただきます。

私は1982年に2期生として本学医学部医学科を卒業し、第2内科(現在の消化器・血液内科)に入局するとともに大学院に進学しました。初代教授の細田四郎先生、第2代教授の馬場忠雄先生(前滋賀医科大学学長)、第3代教授の藤山佳秀先生にご指導いただき、クローン病や潰瘍性大腸炎、吸収不良症候群などの患者さんの治療にあたりました。当時は、抗TNF- α 製剤などは開発されておらず、ステロイドや栄養療法が内科治療の中心であった時代です。その経験から、栄養管理の基礎を学びました。また、消化管内の栄養素と小腸機能に関する基礎研究もおこない、1986年に大学院を修了しました。

2000年から2001年にかけて、文部科学省の在外研究員としてロンドン大学に留学しました。Microdissection法で腸の絨毛を単離するという手技を学び、レクチンなどの消化管増殖因子の研究をおこないました。慣れない海外での一人暮らし、さらには研究室に日本人一人の環境には随分と苦労しましたが、今となっては良い思い出です。

帰国後に、京滋では初めてとなる栄養サポートチーム(NST: nutrition support team)を立ち上げ、消化器内科以外の患者さんの栄養管理にも関わるようになりました。2005年には附属病院に新設された栄養治療部の副部長となり、全国の国立大学で初めての栄養に

関する専任医師となりました。NSTの活動を通じて様々な患者さんの栄養管理に関わる中で栄養代謝病態に関心を持ち、管理栄養士の先生方とともに間接熱量計を用いた臨床研究をおこないました。その成果は、国内外の学会で発表し、多くの論文として報告することもできました。滋賀医科大学から、エネルギー代謝に関するエビデンスの発信が出来たと考えています。

一方、栄養領域では最大の学会である日本静脈経腸栄養学会の理事(現在は副理事長)として、医師やメディカルスタッフへのセミナーの講師を務めるほか、静脈経腸栄養ガイドライン第3版の作成にも参加しました。また、テキストブックの責任編集やNST専門療法士の問題集の監修も担当しました。

今後は、これらの経験を生かして、滋賀医科大学医学部看護学科の学生教育、大学院教育、さらには研究指導などに全力で取り組みたいと考えております。

今回、学長の塩田浩平先生、病院長の松末吉隆先生、看護学科長の桑田弘美先生のご配慮、ご支援を賜り、現職である附属病院栄養治療部部長も継続させていただくこととなりました。すでに第4学年の栄養ゼミでは、栄養治療部の機器を用いた実習なども行っています。今後、臨床栄養における第一線での活動に加えて、看護学生への栄養教育、医学生への栄養教育、さらには大学院教育と忙しい生活となりますが、母校である滋賀医科大学のために精一杯努めたいと思います。どうぞ、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

経歴

- 1982年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
- 1986年 3月 滋賀医科大学医学部大学院修了
- 1986年 5月 彦根市立病院 内科医員
- 1987年 4月 同 内科医長
- 1990年 5月 誠光会草津中央病院(現:草津総合病院) 内科医長
- 1992年 3月 滋賀医科大学 第2内科 助手
- 1998年 6月 同 講師
- 2000年 9月-2001年 7月
文部科学省在外研究員として、Imperial College School of Medicine, Hammersmith Hospital, Department of Histopathology, University of

Londonに留学

- 2002年 4月 滋賀医科大学 消化器内科 講師(大講座制に伴い)
- 2005年 8月 滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 副部長
- 2007年 10月 滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 病院教授
- 2012年 7月 滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 准教授
- 2014年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 部長
- 2017年 6月 滋賀医科大学医学部 看護学科基礎看護学講座 教授

小児科学講座



准教授 多賀 崇

2017年6月1日付で小児科学講座准教授を拝命しました多賀崇（たがたかし）です。

私は大阪生まれで、小学校3年に滋賀県大津市に転居してきました。以後、小中高と大津の学校を卒業し、滋賀医科大学に入学しました。滋賀医大在学中は硬式庭球部に所属し、学業は最低限にとどめ、6年間テニスばかりしていました。卒業後は、今でも悩まされているアレルギー疾患で幼少時からしばしば小児科でお世話になったことから小児医療に興味をもっておりましたが、幅広い分野の疾患を診れること、未来志向の診療科であることと、触診したときのこどもの柔らかいお腹の心地よさも後押しして小児科医を選びました。

滋賀医科大学小児科に入局後は、研修医時代に受け持った白血病患者さんと関わりや上司の何気ない勧めで血液・腫瘍疾患に興味を持ち、以後30年近くその分野を中心に診療と研究をしてきました。滋賀県での小児血液腫瘍疾患（小児がん）の診療は滋賀医科大学医学部附属病院でその多くが行われています。白血病を中心とする小児がんは難治であり、また希少疾患であることから、私が医師になったころから全国レベルの多施設共同の臨床研究による治療が盛んに行われ、そのおかげで今では多くの小児がん患者の治療が望めるようになってきました。滋賀医大も早くからこの他施設共同研究に参加しておりましたが、一担当医として診療を続ける一方、2003年にALL Japanでの臨床研究グループである小児白血病リンパ腫研究グループ（現小児がん研究グループ）が発足して以来、急性骨髄性

白血病（AML）を中心に、全国レベルでの臨床研究グループ体制の構築と臨床研究の立案と実施に積極的に関わり、小児がん全体の予後の改善と合併症の少ない治療開発に携わっています。

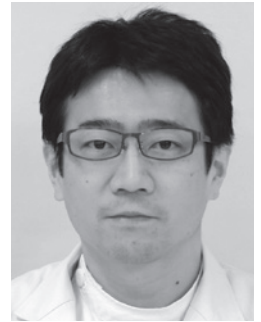
また、1998年11月から2000年3月の米国ロサンゼルス小児病院留学中は、脳腫瘍の血管新生に関する研究をしました。いろいろなハプニングがありましたが、研究体制のみならず、ライフスタイルや考え方の日本との違いを身をもって経験することができ、大きな財産になりました。

私は、小学生の途中から留学時を除き、ずっと滋賀県で生活、仕事をしてきた滋賀県人です。琵琶湖を中心にしたすばらしい環境を有しつつ大都市近郊の利便性を持つ滋賀県をこよなく愛しております。今後はこれまでの経験を活かし、専門とする小児がん医療を継続する一方、滋賀県で活躍する小児科医の育成に尽力していきたいと思っております。今度ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

経歴

- 1986年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
- 1986年 4月 滋賀医科大学附属病院 研修医(小児科)
- 1988年 4月 滋賀医科大学大学院入学
- 1993年 4月 長浜赤十字病院 小児科
- 1995年 5月 滋賀医科大学 小児科 助手
- 1998年 11月-2000年 3月
米国ロサンゼルス小児病院血液腫瘍部門
Research fellow
- 2009年 2月 滋賀医科大学 小児科 講師
- 2017年 6月 滋賀医科大学 小児科 准教授

医療安全管理部



准教授 伊藤 英樹

このたび2017年7月1日付けで医療安全管理部の准教授を拝命致しました。私は金沢大学を卒業後、北陸3県で循環器内科医として勤務しておりましたが、何れは出身地である滋賀県の地域医療に貢献したいという気持ちが年々募るようになっておりました。ご指導いただいた金沢大学第二内科馬淵宏教授の退官と同時期に堀江教授からお声をかけていただき、2005年に地元守山市に帰郷し、以後10年間、本学循環器内科の一員として、3D病棟、カテーテル室、手術部、救急部、ICUなどの部門で様々なスタッフの皆様の協力を得ながら循環器のチーム医療に貢献させていただきました。また、金沢にいた頃から取り組んでおりました遺伝性不整脈の研究を、堀江教授の研究室で続けさせていただきました。生理学研究所、パリ大学への留学や、多くの大学院生と仕事をする機会もいただいたことで、私自身多大なる刺激を受け、研究意欲の向上やその後の医療観を形づくる重要な経験をさせていただきました。

昨年医療安全管理部での仕事のお話を松末病院長、田中副病院長、手塚前副部長からいただきメンバーとなってから1年が経ちましたが、現在も周りの人のサポートを得つつ、日々試行錯誤しながら悪戦苦闘しております。というのも医療安全は歴史の浅い分野であるが故に、分野のアウトラインを学ぶための、内科学でいえばハリソン内科学のような成書と言われるような書籍がありません。そこで、関連のある書籍を自分で探して読んだり、講演会に行き他大学の医療安全管理部の先生方と交流を持つことを通じて自身の中に循環器内科に並ぶ医療安全の引き出しを作ることが最

優先であると考えて現在取り組んでおります。今では手術室などで利用されることが常識となったタイムアウトを考案したアトール・ガワンデ先生は、もとは麻酔科医であります。私も今まで経験してきた臨床医としての視点を忘れることなく、滋賀医大の医療環境に合った、独自の医療安全を突き詰めたいと思います。

当初、医療安全は病院を「管理する」部門だと考えておりましたが、医療安全への学びを深めるうち「教育する」部門だと考えるようになりました。院内の健全で安全な運営のために職員が常に医療安全の意識を持って業務を行えるように有効な働きかけをすることが使命であると考えております。一例を挙げるとカルテを論理的に書くことや患者から適切にインフォームドコンセントをとることなど、医師としての基本所作を身に着けることが医療安全を意識する前にまず必要なことであり、医療経験のない医学生にこそ、医師としての根本的な心構えとして上記の基本所作の重要性をしっかりと学んでもらえるような教育をしてまいりたいと考えております。滋賀医大の医療の質の向上のため、さまざまな部署と連携し、滋賀医大一丸となって良質な医療を提供できるよう、若輩ながら全力で取り組んでまいり所存ですので、何卒ご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願いいたします。

経歴

- 1996年 3月 金沢大学医学部卒業
- 1996年 4月 金沢大学医学部附属病院 第二内科入局
- 1999年 4月 済生会金沢病院 内科
- 2000年 4月 金沢循環器病院 循環器科
- 2002年 2月 金沢大学大学院 医学研究科修了
- 2003年 4月 自然科学研究機構生理学研究所 液性情報研究部門 研究員
- 2004年 4月 石川県立中央病院 循環器内科 医長
- 2006年 4月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科 助手
- 2007年 4月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科 助教
- 2011年 2月 パリ第6大学 医学部心臓遺伝学研究部門 研究員

- 2012年 7月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科 学内講師
- 2016年 7月 滋賀医科大学 医療安全管理部 講師
- 2017年 7月 滋賀医科大学 医療安全管理部 准教授

基礎看護学講座（基礎）



准教授 中西 京子

2017年7月1日付で、基礎看護学講座准教授を拝命いたしました。

私は京都市立看護短期大学を卒業後、京都市立病院で看護師として手術室、外科病棟等で11年間勤務しました。その後、縁あって滋賀県に引っ越し、1988年4月から滋賀県立総合保健専門学校において看護学科の教員としての最初のスタートを切りました。2005年4月からは、滋賀県の医療行政を担う医務薬務課への異動となり、圏域での看護や在宅医療分野への施策立案に携わってまいりました。特に看護行政は、量の確保と質の確保の両面から考えた施策が重要であり、国の保健医療福祉の動向を踏まえ、県の課題、県民のニーズ等を把握しながら予算を立て事業化へとしていきました。そして、新人看護職員研修やがん・糖尿病専門分野看護師研修、訪問看護ステーション・福祉施設の看護職員の研修、助産師キャリアアップ研修等、質の向上に向けた研修の企画立案等を行う中、基礎教育の重要性を実感しました。また、行政への異動と時を同じくして、滋賀医科大学医学系研究科に社会人入学し、2007年9月に修士課程を修了しました。修士課程では、新人看護職員の職業性ストレス・抑うつに関連する要因について研究しました。この大学院での2年半は、私にとって、看護を探究することへの面白さと同時に、研究者としてのあり方を厳しくご指導いただき、本当に充実した大学院生活を送ることができました。

2012年4月に滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座 講師として着任し、5年間、看護学教育の基

礎となる看護理論、看護過程論、看護技術論、看護管理理論等の講義および基礎看護学実習を担当してきました。これからも理解しやすく、興味を持って学習していただける講義・演習を目指し、そして何よりも看護することの喜びを実感できるように教育に情熱を注いでいきたいと考えています。

大学院教育では、これまでの教育研究活動および看護行政での経験を生かし、高度専門職コース「看護管理実践」において高度な看護管理者の育成に尽力したいと考えています。看護の臨床現場で管理的な立場にある方にとりわけ必要なのは、専門職/管理職としての高い倫理観、看護職の行う複雑な仕事を多職種等に伝える高い表現力、多職種や病院幹部らと対等に渡り合うだけの交渉力だと考えます。従って大学院では、看護の現象を深く探求し抽象概念を用いつつそれらを説明する訓練を通して高い表現力を身につけること、そして、看護の現象を研究的に探求することを通して、看護専門職に必要な倫理的要素についても考察を深めることで研究倫理についても教育していきたいと考えています。看護行政で培ったものを基に、県および国の看護行政の動向を見据えた看護管理者としてのあり方を伝えていきたいと考えています。

教員としても、研究者としても未熟者ではございますが、滋賀医科大学の発展のために尽力する所存です。皆様のご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

経歴

1977年	3月	京都市立看護短期大学卒業
1977年	4月	京都市立病院 看護師
1988年	4月	滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 嘱託実習指導員
1989年	4月	滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 専任教員
1995年	4月	滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 主任主事
2002年	4月	滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 学科長
2005年	4月	滋賀県健康福祉部医務薬務課 主幹
2007年	9月	滋賀医科大学大学院 医学系研究科看護学専攻修了
2008年	4月	滋賀県健康福祉部医務薬務課 副参事
2012年	4月	滋賀医科大学 医学部看護学科基礎看護学講座 講師
2017年	7月	滋賀医科大学 医学部看護学科基礎看護学講座 准教授

外科学講座（消化器外科）



准教授 清水 智治

2017年8月1日付けで外科学講座の准教授を拝命いたしました。私は1993年に滋賀医科大学を卒業しました。学生時代には剣道部で活動し、現在も大学剣道部の学生と月数回は稽古をしています。大学卒業後、小玉正智教授が主宰する滋賀医科大学医学部外科学第一講座に入局し、附属病院や関連施設にて消化器外科学の研鑽を積んでまいりました。1997年より大学院に進学し外科侵襲学に関連する研究を開始しました。教室と東レ株式会社の共同研究にて開発されたエンドトキシン除去向け吸着型血液浄化用浄化器（トレミキシン®）の作用機序解明や治療効果に関する研究に取り組みました。その後、出血性ショックにおけるエンドトキシンやペプチドグリカンの生体反応への影響について研究しました。この研究は、臨床でも消化器外科周術期の血中ペプチドグリカンと感染性合併症に関する研究につながりました。2003年より米国 University of Alabama at Birmingham に Postdoctoral Fellow として2年間留学し、出血性ショック後に発生する臓器障害に対する性ホルモンの影響について研究しました。帰国後は、臨床に直結する外科侵襲学として外科感染症、敗血症性ショック、エンドトキシンに関連する臨床研究を継続しました。現在は、新しいエンドトキシン測定法であるESP法の敗血症診断システムとしての臨床的評価を救急集中治療医学講座と共同で行っております。今後も、外科侵襲学に関する分野の臨床研究・基礎研究を若手研究者と共に継続したいと考えております。臨床では、2005年から乳腺・一般外科に所属し乳腺疾患などの診療に従事しました。その後、

2006年から大腸肛門疾患を専門分野とし腹腔鏡下大腸手術の導入を行いました。当時は、初発大腸癌に対する腹腔鏡下手術は早期癌に限られており10%程度でありましたが、腹腔鏡下手術の適応を順次拡大していき、2016年には約90%の症例が腹腔鏡下で施行可能となりました。2013年からは直腸悪性腫瘍に対して腹腔鏡下手術の手術支援ロボット支援機器であるダヴィンチを導入し先進医療の取得に向けた症例蓄積を行っております。現在、本学の若手医師・関連施設の医師への腹腔鏡下大腸手術の教育・臨床指導に積極的に取り組んでおります。さらに、2018年度より導入される新専門医制度では、谷 眞至教授・浅井 徹教授の指導のもと、滋賀医科大学外科学講座で専攻医が修練しやすい研修体制の整備し、各診療科と関連施設との十分な連携をとり若手外科医師の育成にも努めて参りたいと考えております。

経歴

1993年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
 1993年 6月 滋賀医科大学医学部附属病院 第一外科 医員(研修医)
 1994年 4月 京都第二赤十字病院 外科
 医員(臨床研修医・臨床修練医)
 1996年 4月 西京都病院 外科 医員
 1997年 4月 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程入学
 2001年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院 外科 医員
 2003年 5月 米国 University of Alabama at Birmingham,
 Postdoctoral Fellow
 2005年 5月 滋賀医科大学 外科学講座 助手
 2010年 5月 滋賀医科大学 外科学講座 学内講師

2016年 7月 滋賀医科大学 外科学講座 講師
 2017年 8月 滋賀医科大学 外科学講座 准教授

地域医療教育研究拠点 (JCHO 滋賀病院)

准教授 中島 滋美



8月1日に地域医療教育研究拠点の准教授を拝命しました中島滋美です。拝命と同時に独立行政法人地域医療機能推進機構 (JCHO) 滋賀病院に出向となりました。それまでJCHO滋賀病院に勤務しておりましたので勤務地は変わりませんが、時々大学に来させていただきます。

私は1982年(昭和57年)本学卒の2期生で、ラグビー部とグリークラブ(合唱団)OBです。私は卒業後旧第二内科(現消化器血液内科)に入局し、2年間の初期研修後は医員の1年を除いてほとんど学外に勤務しておりました。しかし研究面では消化器内科と病理学講座でお世話になり、学位取得後は非常勤講師と臨床教授をさせていただいております。今回JCHO滋賀病院が本学の教育研究拠点になり准教授にならせていただきました。

JCHO滋賀病院では、現在医学科第5学年と第6学年が臨床実習に来ています。第5学年はほぼ1年を通して2週間ずつ実習に来ています。総合力のある医師が求められる昨今、総合内科・総合診療科は必ず実習してもらう診療科です。その重要性のために准教授のポストができたと認識しています。私はJCHO滋賀病院では総合診療科部長として総合内科・総合診療科を担当しています。日本内科学会総合内科専門医・指導医、および日本プライマリ・ケア連合学会(総合診療科のメイン学会です)認定医・指導医の両方の資格を持っています。来年度から始まる新専門医制度では、JCHO滋賀病院が基幹施設となる総合診療科専門

医研修プログラムを用意しています。私はその指導責任者をさせていただきます。

私は中学生の時に父を癌で亡くしましたので、癌をやっつける研究者になろうと思いで元(草津市民です)の滋賀医大に入学し医師となりました。私は本学での研究やアメリカ留学の経験を活かし、この20年はJCHO滋賀病院でピロリ菌感染を考慮した効率的な胃がん検診や効果的な胃がん死予防システムの構築に取り組んできました。最近では専門家の1人として教科書的な本や厚生労働省研究班報告書などの分担執筆をさせていただいております。そのほかに機能性消化管障害や胃の内視鏡診断などでも教科書的な本や雑誌の執筆を分担させていただいております。私は臨床では理想的な診療を目指してやってきたつもりですが、上述のように研究志向があります。長年一般病院で培った経験と人脈を生かし、今だからこそできる大規模多施設共同研究をしたいと強く思っています。

私は本学卒業後ほとんど学外にりましたが、母校にはお世話になりました。今度は滋賀医大の教員として大学に貢献したいと思っています。大学に勤務するのは29年ぶり、懐かしい教職員にお出会いすることがありうれしく思います。また、JCHO滋賀病院で実習した学生さんが私の顔を覚えていてくれて挨拶してくれるのもうれしいです。特異な経歴をもつ教員ですが、どうぞよろしくお申し上げます。

経歴

1982年 3月 滋賀医科大学 医学部医学科卒業
 1982年 6月 滋賀医科大学 医学部附属病院 研修医(第二内科)
 1984年 5月 草津中央病院 内科医員
 1985年 5月 大津市民病院 技術吏員(内科・消化器病センター医員)
 1988年 6月 滋賀医科大学医学部附属病院 医員(第二内科)
 1989年 5月 松下冷機株式会社冷蔵庫事業部 健康管理室室長(産業医)
 1995年 8月 Visiting Assistant Professor, Section of Gastroenterology, Department of Medicine, Baylor College of Medicine, Houston, Texas, USA.

1997年 6月 草津総合病院 内科部長
 1998年 7月 社会保険滋賀病院 内科・消化器科 部長
 1999年 1月 滋賀医科大学 第二内科(現消化器血液内科) 非常勤講師兼務
 2003年 6月 社会保険滋賀病院 健診部長(～平成24年3月)
 2005年 4月 滋賀医科大学 臨床教授受称
 2012年 4月 社会保険滋賀病院 総合診療科部長
 2014年 4月 独立行政法人地域医療機能推進機構滋賀病院 総合診療科部長
 2017年 8月 滋賀医科大学 地域医療教育研究拠点 准教授(JCHOに出向)

リハビリテーション部



准教授 児玉 成人

2017年10月よりリハビリテーション部准教授を拝命いたしました。この場をお借りして、ご挨拶申し上げます。私は、1995年（平成7年）に滋賀医科大学を卒業後（15期生）、滋賀医科大学附属病院 整形外科で初期臨床研修を行い、その後、関連病院にて整形外科の研修を続け、特に骨折を含む外傷に従事してまいりました。2003年に整形外科専門医を取得後は、上肢外科の研修に専念しました。2003年には小郡第一総合病院で上肢外科・マイクロサージャリーの研修を行い、2004年より滋賀医科大学整形外科にて上肢外科・手外科・足外科に従事しました。特に、特殊な技術を要するマイクロサージャリーを用いた遊離組織移植、神経・運動機能再建手術を専門として、滋賀県全体から紹介を受けております。2014年には上肢外科の臨床研究で今井教授のご指導の下、医学博士を取得しました。

一方、2007年からは骨軟部腫瘍も担当しています。骨軟部腫瘍は整形外科の中でも特殊な領域で、特に悪性腫瘍は稀少がんであり、滋賀県で唯一、骨・軟部悪性腫瘍の集学的治療が可能です。今後、更なる研鑽を積み、地域医療に貢献していく所存であります。また、これまで、多数の手術を行ってきた中で、その術後成績の向上にはリハビリテーション医療が不可欠であることを強く感じてまいりました。特に悪性腫瘍切除後のがんリハビリテーションや上肢外傷後におけるハンドセラピーに興味を持っております。来年度より新専門医制度が始まりますが、リハビリテーション科は18基本診療科の一つに数えられています。滋賀県では滋賀医科大学リハビリテーション科を基幹施設として専

門医プログラムを展開する予定です。

リハビリテーション医学はさまざまな病態、疾患、外傷などにより生じた機能障害を回復し、残存した障害を克服しながら人々の活動を育む医学分野です。さまざまな疾患や障害を対象とし、多くの診療科や専門職と関連するため、それだけ多くの知識と実用性を必要とします。また、社会の高齢化が急速に進んだ現在では、リハビリテーション医学・医療の対象者は、小児から高齢者まですべての年齢層に広がり、運動器障害、脳血管障害、循環器や呼吸器などの内部障害、摂食嚥下障害、小児疾患、がんなど幅広い領域に及んでいます。今後、多くの多種職の方々と接する機会が増えると思いますが、今までの経験を活かし、幅広いニーズに対応していきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

経歴

1995年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
 1995年 5月 滋賀医科大学 整形外科 入局
 1996年 7月 彦根中央病院 整形外科 勤務
 1998年 4月 尼崎中央病院 整形外科 勤務
 1999年 4月 多根総合病院 整形外科 勤務
 2003年 5月 小郡第一総合病院
 手外科・マイクロサージャリー 国内留学
 2004年 1月 近江草津徳洲会病院 整形外科 勤務
 2004年 9月 滋賀医科大学 整形外科 勤務(医員)
 2014年 3月 滋賀医科大学 医学博士取得

2014年 4月 ストラスブール大学 手外科
 バリ大学附属コシャン(Cochin)病院骨軟部腫瘍科留学
 2015年 12月 滋賀医科大学整形外科 講師
 2017年 10月 滋賀医科大学附属病院リハビリテーション部 准教授
 (リハビリテーション科診療科長)

内科学講座（血液内科）



准教授 木藤 克之

2017年10月1日付で、内科学講座（血液内科）准教授を拝命いたしました木藤克之です。私は医学部6期生として1980年に滋賀医科大学に入学しました。出身は善光寺で知られる長野県です。

学生時代は、高校から続けていた空手部が当時なかったため、合気道や少林寺拳法の有段者の友人たちと一緒に道場で練習をしていました。しかし、それぞれの武道の組手の違いから、徐々に練習回数が減っていき、第1学年の後半からは、もっぱらアルバイトや麻雀に明け暮れる日々となりました。正直、授業の出席率はとても悪かったと反省しています。

卒業後、当時の第二内科（現 消化器・血液内科）に入局しました。医師になって最初に担当した患者さんが急性白血病の症例で、その診療経験から何としても血液悪性疾患を治したいと思い、血液内科を専門にすることを決めました。大学での研修ならびに公立甲賀病院での2年間の勤務の後に滋賀医科大学大学院に進学しました。当時はまだ血液学を目指して滋賀医大の大学院に入学した者はほとんどいない状況で、現在の消化器内科教授である安藤先生や中央診療部門病理部の元教授である岡部先生のご指導のもと、血小板を産生する骨髓巨核球系細胞の研究を重ねて博士号を取得させていただきました。大学院生でありながら、病棟主治医も兼任していましたので、日中はほとんど病棟で臨床をして、実験室にもどるのは夜の9時以降であるという日々が続きました。しかし、その時に学んだ研究に対する視野が、現在の臨床の場での様々な事象を解釈する原動力となっています。

今、滋賀医大血液内科では患者さんを中心としたチーム医療を実践しています。そのきっかけとなったのが大学院卒業後に赴任していた彦根市立病院院長（当時 林進先生）の勧めで米国ミシガン大学骨髄移植センターに短期臨床研修に行かせていただいた経験です。ミシガン大学の医師たちの臨床スタイルは見事に一人の患者をすべての医療スタッフが情報共有しながら支えているという、チーム医療でした。以来、私が働いてきたいくつかの病院では必ずチーム医療を実践するようにしてきました。

教育については、2008年から2014年まで海外自主研修；ケニア共和国におけるHIV/エイズの学生の臨床研修に同行し、学生諸君とともに国際保健について学んできました。この経験は医学部・看護学部の授業のみならず、医師会や学会での講演を通して、多くの医療関係者にエイズというものを啓発することに繋がっていると自負しています。同時に同国のナイロビ大学、ケニア中央研究所と本学の学術交流に貢献できたことは大きな喜びでした。

今、私に与えられた最大のテーマは、滋賀医科大学の血液内科を日本、さらに世界に誇れる教室にしておくための人材教育を続けていくことだと思っています。臨床、教育そして研究を益々発展させていきます。これからも宜しくお願い申し上げます。

経歴

1986年	3月	滋賀医科大学医学部卒業
1986年	4月	滋賀医科大学 第二内科 研修医
1988年	4月	公立甲賀病院 内科医員
1990年	4月	滋賀医科大学大学院
1994年	4月	彦根市立病院 血液内科 在職中に彦根市よりの派遣で米国ミシガン大学骨髄移植センターに短期臨床研修
2004年	4月	滋賀医科大学 血液内科 助手
2010年	4月	滋賀医科大学 血液内科 学内講師
2012年	7月	長浜赤十字病院 血液内科 部長
2015年	4月	滋賀医科大学 血液内科 講師・診療科長

2016年	8月	滋賀医科大学 血液内科 病院教授・診療科長
2017年	10月	滋賀医科大学 内科学講座(血液内科) 准教授・病院教授 血液内科 診療科長

キャンパス
ライフ
Campus
life

海外自主研修

オーストラリアの 海外自主研修を通して

医学科第4学年

川崎 翠



■研修のきっかけ

私は8月16日～25日の2週間、オーストラリア、シドニーのニューサウスウェールズ大学 老年神経精神科 (Aged care neuropsychiatry) で研修をさせていただきました。私は以前から認知症に興味があり「欧米における認知症の医療ケアを見たい!」という漠然とした思いがありました。4年時の自主研修はチャンスだと思い、学外の知り合いの先生に相談したところ、研修先を紹介していただくことができました。

事前準備として、日本の認知症の現状をスライド資料とともに英語で説明できるようにすること、研修先の先生が執筆した認知症関連の論文を読むこと、神経精神科の教科書に目を通すことを行いました。オーストラリアに渡航するのも海外の病院で研修をするのも初めてだったので不安と緊張でいっぱいでしたが、欧米の臨床を見れるということでドキドキワクワクしながら出国しました。



研修先

■研修先にて

研修先では先生方やスタッフのみなさんが“Welcome!”と温かく歓迎してくださり、初日から一生懸命私の名前を覚えてくださいました。異国で心細かった私にとって、みなさんが笑顔で接してくださったことに温もりを感じました。

初日に病院を歩いてみてまず驚いたのは、医師が白衣を着ておらず、私服に聴診器といったカジュアルな格好であったことです。医師と患者のやりとりを見ても、リラックスしていて距離が近いように思えました。



教授の診察室兼オフィス



教授と私

■研修内容

老年神経精神科は馴染みがなく、こういった患者さんが受診するのか具体的なイメージが持てないまま研修が始まりましたが、外来、病棟、在宅訪問、Memory Clinic、研究のミーティングなど様々な場に参加させていただき、認知症の診断から治療までの全過程を見ることができました。

Memory Clinicと呼ばれるもの忘れ外来では、もの忘れが心配な人やその家族を対象に認知症の検査を行っていたのですが、医師のみならず看護師、心理士、ソーシャルワーカー、作業療法士などたくさんの専門家が検査や診断、告知やケアに関わっていました。ディスカッションで平等に発言していたり、心理士の一部はCT/MRIの解読ができたりと、日本と比べてメディカルスタッフの立場が強い印象を受けました。

また、大学病院であるにもかかわらず、教授自ら認知症患者の在宅訪問を行っていました。同席させていただいたところ、医師が患者さんの薬の管理をするだけでなく、介護者を労わり非薬物的なケアについてのアドバイス（夜に寝付かない患者さんに対しては、出身国の音楽を聴かせるなど）をする姿を垣間見ることができました。



Memory Clinicのチームミーティング

■息抜き

オーストラリアの8月は冬なのですが、冬とは思えない暖かさで、日によっては半袖半ズボンで歩いている人を見かけました。私は自然や動物が大好きなので、16時に研修が終わり次第、ビーチを散策したり、公園や動物園に足を運びました。コアラやカンガルーと思う存分たわむれることができ、最終的には2週間に4つの動物園を制覇しました。

また、私は滋賀医大の卓球部に所属しているのですが、研修先の大学の卓球部の練習に突撃しました。練習メニューがなかったり、好きなタイミングで休憩できたりと、カルチャーショックを受けつつも自由な雰囲気を楽しみ、新しい仲間をつくることができました。

■みなさんに伝えたいこと

医学部では必修の授業が朝から晩まであり、周りのみんなと同じ時間を過ごし、また試験前には膨大な知識を頭に詰め込まざるを得ません。私は、そんな日々の中で知らないうちに視野が狭まり「自分がどういう人間になりたいのか、どういう医師になりたいのか」

という原点を見失うことができました。

私にとって海外自主研修は、それをリセットし自分の原点を見つめ直すいい機会になりました。違う環境に飛び込み、違う価値観をもった人たちと接することこそ、医学生に大事なこともかもしれないと気づくことができました。海外自主研修に限らず、後輩のみなさんにも、そういった自分のcomfort zoneから出ることをおすすめしたいです。私もその姿勢を忘れずに残りの学生生活を過ごしたいと思います。



シドニーで有名なBondi Beach



動物園

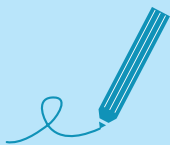


研修先の大学の卓球部の練習

テンプル大学での 自主研修を終えて

医学科第4学年

生野 泰彬



僕は今回、アメリカ合衆国東海岸にあるフィラデルフィアという町にある、テンプル大学に行って参りました。そこで、勝山教授のハーバード大学時代の友人でいらっしやいますDr. Raymond Habasの研究室に一ヶ月少し受け入れて貰いました。

自主研修以前に一人で海外に行ったことは無く、語学も堪能ではなかったため海外自主研修へ行くことに対しては否定的でした。しかし、医師（または研究者）として英語圏で働く可能性があることを考えると、一度アメリカに滞在して抵抗感を無くす必要があると思い、勝山教授にアメリカのラボを紹介して貰いました。

出国直前に、海外に何年も留学しておられた勝山教授に、日本とは異なるアメリカにおけるマナーやライフスタイルといったことについて教えていただきました。そのおかげで、特に大きなトラブルもなくアメリカ滞在を楽しむことができたように思います。皆さんも海外自主研修に行く際は、研修先を紹介して頂いた滋賀医大の先生に、向こうの暮らしについて聞いておくことをおすすめします。

いざ海外自主研修に行こうと思ったときに困るのは、滞在する住居の用意だと思います。現地の不動産サイトで家を借りるのは、勝手を知らない日本人にとっては困難です。そこで、手軽に家を借りることができる”Airbnb”というアプリを用いることをおすすめします。また、アメリカ等で普及しているものなのですが、タッチ操作だけで目的地まで安価で車に乗せて貰えるアプリ”Uber”のインストール・設定をしてから出国することをおすすめします。

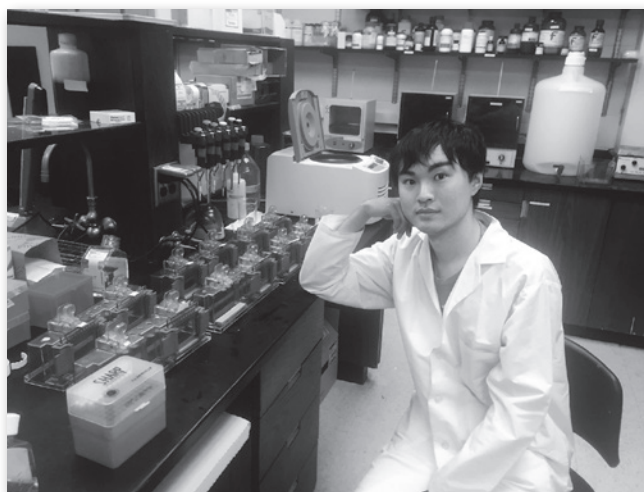
さて、長々と出国前のことについて書くのも冗長になりますので、アメリカでの話を書き綴りたいと思います。今回、受け入れ先の先生に一ヶ月かけて「免疫沈降法」と「ウェスタンブロットティング」という、2つの基本的な実験方法をマスターできるように便宜を図っていただきました。ラボの大学院生であるBaihao Su先生の元で、平日は朝9時から夕方6時まで実験をして帰る、というルーチンで過ごし、きちんとデータを残すことができました。これだけ聞くと一日中ラボに拘束されて退屈な感じがしますが、ラボの人たちが気さくに話しかけてきてくださったおかげで、実験をしながら楽しく過ごすことができたように思います。



テンプル大学中央広場にて

で、実験をしながら楽しく過ごすことができたように思います。

ここで、多くのアメリカ人は、日本人は英語を話すのが苦手であることを留意している上、外国人に対しては気さくなので、コミュニケーションには言うほど困らないと感じました。例えば、近場のバーで一人で飲んでいたら、隣の席に座っていたテンプル大学の学生が平易でゆっくりとした英語で話しかけてくれ、共にアメリカンフットボールの試合を見に行ったことがありました。勿論、詐欺や恐喝目的で気さくに話かけてくる人もほんの少し存在して、警戒はすべきなのですが、ほとんどのアメリカ人は積極的に友



実験をする光景

好関係を築こうとしてくる所謂「イイ奴」なのです。

アメリカには、日本とは違った趣の観光名所が沢山あります。今回行ったフィラデルフィアは、丁度ニューヨークとワシントンの間地点だったので、休日を利用して遊びに行きました。インターネットで検索すれば色々出てくるので詳細は割愛しますが、ミュージアムが日本のものに比べて大きくて立派であると思いますので、両都市に訪れた際は観光に行くことをお勧めします。あと、どちらの都市も、大都会を期待していくとがっかりするかもしれません。ニューヨークは東京より小さいですし、ワシントンも奈良のような町です。ただ、どちらも歴史ある日本では見られない町並みが残っていますので、異国情緒は溢れています。

最後に、自主研修で得たアメリカで働くことに対する意識の変容について語ります。今回、研修先の先生に医師としてアメリカで働くことを強く勧められました。その理由として、日本よりも遥かに高給である(年間300,000ドルは下らない)上、科にもよりますが勤務

時間が日本よりも少ない傾向にあることが挙げられるようです。ただ、アメリカの病院は非常にcompetitiveであり、使えない医師はバツサリと切り捨てられると聞きます。自主研修を利用して渡米し、アメリカのcompetitiveな空気に触れることは、互いに切磋琢磨し、能力があれば大きく評価される、そんなビッグアメリカを夢見ることのできる良い機会になったと確信しております。



フィラデルフィアの古い町並み



バーで知り合ったアメリカ人と見るアメフトの試合



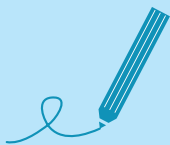
エンパイアステートビルから見るニューヨークの夜景



自由の女神

ドイツでの自主研修を終えて

医学科第4学年
木内 亮平



■ 動機と経緯

第3学年の循環器系の授業で、心臓血管外科は機能改善外科であり、手術で患者さんを劇的に良くすることができると学び、心臓血管手術に興味を持ちました。

そして、第4学年の自主研修では海外に行くことができ、日本と海外の手術と研究が見れる貴重な機会だと感じ、心臓血管外科の浅井徹教授に相談させていただき、ドイツで働く滋賀医大の先輩がいる病院を紹介していただけることになりました。

■ 海外自主研修先

ドイツ北部の港湾都市ハンブルクにあるエッペンドルフ大学病院（UKE）のハートセンターに行かせていただきました。そこはドイツの心臓血管治療の中心施設の1つで、年間約3000件の心臓手術が行われているそうです。滋賀医大の先輩である内藤志歩先生が勤務しておられ、内藤先生には準備段階から研修まで大変お世話になりました。

私は1人で海外に行くのは初めてで、ヨーロッパには行ったことがなかったので、かなり不安でしたが、同級生や多くの方々にご協力いただきながら準備を進め、UKEで研修することが叶いました。

■ 研修内容と主な学び

朝のカンファレンスへの参加後、手術や病棟を見学したり、大動脈二尖弁に関する研究について学ばせていただきました。

UKEでの研修で印象的だったのは、Minimally invasive cardiac surgery（MICS）が行われていたことです。MICSは手術創が小さく術後の疼痛が比較的少なく、美容面で利点があるだけでなく、手技に習熟した医師により行われることにより、低侵襲で行える可能性があります。しかし、MICSが低侵襲であるかどうかは、執刀医の習熟度や患者さんの状態等の様々な要因により左右されると考えられます。MICSは術野が非常に狭小であり、手術操作は難しく、習熟しなければ手術時間が長くなったり、出血量が増えたりと侵襲は大きなものとなります。したがって、施設スタッフ全体として、MICSに対する習熟度が高くないと手術による低侵襲は実現されないと考えられます。

手術による患者さんへの侵襲は、傷の大きさだけでなく、心停止時間等を含めた手術時間の長さも影響するため、侵襲を小さくするためには術者の習熟度や患者さんの状態を含めて術式を決める必要があることを知りました。また、患者さんにとって、より負担の少ない手術の選択肢の一つとしてMICSはあるかもしれませんが、決して最小の侵襲をMICSで実現できるわけではないと感じました。そして、日本内だけでなく海外に行くことで、さらに多面的に医療現場をみる機会が得られると思いました。

カンファレンスにおいては、患者さんの様子や手術の予定を議論されているところを見学でき、ドイツ語でのやり取りされている内容の一部は聴き取れましたが、内容が理解できないことが多々ありました。ドイツ語がわからず、貴重な実習機会を逸してしまうこともありました。このように、言葉が理解不足により学



ハンブルク・エッペンドルフ大学病院



カンファレンスルーム

びの機会が減ってしまったことは、私の準備不足が原因であり、大きな反省点です。しかし、そんな中でも、英語で質問させていただくと熱心に教えていただき、多くのスタッフの方にとっても親切にしていただけました。学ぶ意思を感じてもらうには、積極的に行動するかが大事であり、それにより学ぶ機会が得られたと実感しました。言葉を自在に操れるように訓練するのももちろんのこと、積極的に学ぶ姿勢を常に持ち続けていきたいと改めて思いました。



ドイツの医学生と

■最後に

海外自主研修を進めるに当たり、多大なご指導・ご支援をいただいた、滋賀医科大学心臓血管外科の浅井徹教授、内藤志歩先生、Universitätsklinikum Hamburg-Eppendorf - Hamburg Heart CenterのDr. Evaldas Girdauskas、そして両施設のスタッフの皆様から感謝の意を表します。本当にありがとうございました。



Alles Gute! (お元気で!)



赤レンガの倉庫街

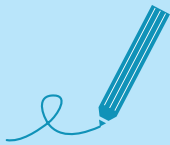


市庁舎

マレーシア国民大学での 研修を通して

看護学科第4学年

齊藤 美祐



2017年5月26日から6月9日の約2週間、マレーシア国民大学での研修に看護学科第4学年の3名で参加させていただきました。私がこの研修に参加したきっかけとしては、多民族国家であるマレーシアでは、様々な言語や文化、宗教がある中でどのような看護が行われているかについて学び、日本の看護に対しても活かせることがあるのではないだろうかということと、日本とは違う医療を自分の目で見、経験することで、視野が広がり、自身の成長にもつながるのではないかと考えたためです。

研修としては、大学の附属病院の見学や訪問看護の同行、小児科看護学実習の一環として看護学生とともに孤児院の訪問などをさせていただきました。研修のなかでも、特にホームレスプログラムが私にとってとても印象に残っています。

ホームレスプログラムでは、ホームレスの方に食料や衣服、歯ブラシ、タオルが配られ、看護学生や病院の看護師の方やその家族の方などホームレスプログラムに興味がある人たちが集まって行われていました。マレーシアのホームレスの方々、マレーシアの首都であるクアラルンプール周辺の幹線道路の高架下に家族で住んでおられる方が多く、生後もない乳児や小さい子供が多かった印象が強かったです。昼間はホームレスの方が仕事のため、ホームレスプログラムは夜に行われ、開始時間は深夜近くにもかかわらず、ミュージシャンの方なども呼んでその場のみんなと一緒に盛り上がり、お祭りのようでした。ホームレスの方とお話させていただく機会もあり、日本ではなかなか味わえないとても刺激的で貴重な経験となりました。

研修を通して、はじめは日本との違いについて目を向けることが多く、ここが日本と違う、ここは同じだという風に見ていたのですが、だんだんとマレーシアならではのその土地にあった医療の姿があるということ、多民族であることによりいろいろな文化や生活が共存した医療が行われている、ということにも目が向くようになり、相違という観点で見るだけでなく、個性という観点でも見るできるようになりました。

研修がない土日は、マレーシア国民大学の看護学科の生徒さんに観光に連れて行ってもらったり、ショッ

ピングを楽しみました。初めて見るモスクに圧倒され、装飾や模様の綺麗さに目を奪われ、イスラムの文化である肌と髪を隠すためのマントの暑さを肌で感じ、聞こえてくる英語やマレー語、中国語は改めて日本にいるのではないのだと実感させられ、少しホームシックにもなったのはいい思い出です。ショッピングでは、スーパー巡りをするのが楽しくて、見たことのない食材や味の想像がつかないお菓子や飲み物は好奇心に駆られました。映画にも挑戦し、いつもは吹き替えでしか観ない映画も、中国語字幕の英語が話される映画をストーリーに置いて行かれないように聞き取るのに必死で、見終わった後の疲労感は今までで味わったことがなかったです。海外に行くことで、日本では経験出来ないことをすることで新たな自分を知ることが出来たり、異文化に触れることで感じるものが、経験したからこそ分かるものがあるということを学びました。

マレーシアでの2週間を通して、多民族が共存して生活されている状況を自分の目で見る事が出来、それぞれがお互いの文化や宗教を尊重し、理解することでマレーシアという国が出来上がっていると感じ、これからグローバル化が進む日本でも、マレーシアのような多種多様な人、もの、考えが受け入れられる柔軟性は日本でも必要なことであると思うし、私が看護師として働いてからもマレーシアの研修で学んだこと、考えたことを取り入れて活かしていきたいと思います。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えて下さった滋賀医学国際協力会理事長、相見先生、相浦先生、桑田先生、白坂先生、輿水先生、水谷先生、また現地でご指導して下さいました先生、学生の方、学生課の皆様、前回のマレーシア国民大学に研修で行かれた先輩方、以上の方々をはじめとする多くの方々、私を日々支えてくれる家族、友人にこの場をお借りして感謝の気持ちを申し上げます。



研修中の写真



ホームレスプログラムに参加する人が着るTシャツ



土日に観光したモスク



ホームレスプログラムで配られるもの



最終日にマレーシア国民大学の方々から頂いたヒジャブ

リレー・フォー・ライフ(RFL)



10月8日(日)と9日(月・祝)の2日間、本学中庭を会場として、リレー・フォー・ライフ・ジャパン2017滋賀医科大学が開催されました。

リレー・フォー・ライフとは、がん患者さんやそのご家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧をめざすチャリティイベントです。リレーウォークではがん患者さんやご家族、そして支援者が交代で夜通し歩き続け、痛みを分かち合い、勇気と希望を与え合います。

学生が主体となって大学で開催する「カレッジリレー」として、昨年に引き続き2度目の開催となり、今年は京都薬科大学、立命館大学薬学部の学生も実行委員に迎え、共に活動しました。

開会式では、日本対がん協会の是澤氏、三日月滋賀県知事、山田副学長のあいさつの後、医学科第5学年の宮嶋実行委員長から熱い想いのこもったあいさつがあり、がん患者さん及びがん経験者の方によるサバイバーズラップからリレーウォークが始まりました。

今年は両日とも晴天に恵まれ、来場者はリレーウォークへの参加や講演会の傾聴、ブースでの健康診断など様々な体験を通してがんに関する見識を深めることができました。

8日の18時30分からはルミナリエセレモニーが行われ、参加者はリレー・フォー・ライフのシンボルであるエンブレティテーブルを眺めながら、実行委員によるご家族への手紙や詩の朗読を聞き、がんによって亡くなった方を偲びました。

9日の正午には学生ラップ・ファイナルラップによりリレーウォークが締めくくられ、24時間にわたるイベントは閉会となりました。

参加者の力により、多くのがん患者の方に勇気と希望を与え、がんに立ち向かう決意を新たにすることができるイベントとなりました。

①夜通し続くリレーウォーク

がん患者さんやそのご家族さん、支援者さん、医療従事者などでチームを作り、夜通しトラックを歩き続けます。

「がん患者さんは24時間がんと闘い続けている」

タスキをつなぎながら、24時間歩き続けることで痛み、苦しさ、つらさを分かち合いがん立ち向かうための勇気、今を生きることの感動を共有しお互いを称えあうためのイベントです。

③ステージイベント

当日のイベントでは、歩いている人を応援し、参加者に楽しんでいただくためのステージイベントを開催します。

がんセミナーや講演会、楽器演奏やダンスパフォーマンスなど、さまざまな企画のイベントです。

②ルミナリエセレモニー

がんで亡くなった方や、今、この瞬間もがんと闘っている方へのメッセージをつづり、キャンドルの光で照らします。

がんで亡くなった方を偲んで、尊い祈りをささげキャンドルのやさしい灯りで暗い夜を照らし、闘病中の方を応援するためのイベントです。



④ブース

グッズ販売やバザー、飲食店などのブースを設けて、がん征圧のための募金を募ります。

がん検診やがん相談、マッサージなど、役に立つ情報を得られる場や楽しんでいただくための場を提供します。



「地域全体でがんと、命と向き合うこと」

リレー・フォー・ライフ・ジャパン2017 滋賀医科大学実行委員会実行委員長

医学科第5学年 宮嶋 佑輔

日本で唯一の「カレッジリレー」、リレー・フォー・ライフ・ジャパン2017 滋賀医科大学が無事成功裡に閉幕いたしました。学生による初の試みであった昨年に引き続き、今年もたくさんの方の多大なるご協力を賜りましたことを大変感謝しております。

今年は天気に恵まれ、終始太陽がまぶしいリレー日和の気候の中でみなさんと24時間を過ごすことができ、非常にうれしく思っております。その日差しに負けにくいくらいに、滋賀医科大学の中庭がまぶしい笑顔であふれていたことが強く印象に残っています。

リレー・フォー・ライフでは、「地域全体でがんと向き合い、がん征圧を目指す」と謳っていますが、文字通り地域のいたるところで様々な形で活躍されている方々が滋賀医科大学に集い、お互いのことを知り、お互いの普段の努力を讃え、地域のつながりの輪を広げる機会になったかと思えます。

また、学生によって運営する「カレッジリレー」の特色として、今回は学生からの情報発信に力を入れ、学生目線で若い世代に向けたがん情報発信を行いました。若い世代ががんについて考えるきっかけになることを願っています。

このイベントが地域のみなさんにとって「がんと、命と、向き合う機会」になっていれば幸いです。つらいことがあっても、必ず綺麗な朝日と共に夜明けがやってくるということ、いつでも人は一人ではなくて支えてくれる人がたくさんいるということがメッセージとして発信できていれば良いなと思います。

今年も学生たちによる試みへの心強い応援ありがとうございました。来年以降も「日本のど真ん中」滋賀から、学生たちの手で生きる勇気を発信し続けていきます。どうぞよろしく願いいたします！



滋賀医大病院 サマーコンサート



8月22日(火)、午後4時から本学附属病院玄関ホールにおいて、滋賀医大病院サマーコンサートが開催されました。

このコンサートは本学学生有志による「患者さんに音楽による癒しの時間をお届けしたい」という趣旨のもとで開催された患者さん向けのコンサートです。

コンサートはピアノステージ、合唱ステージ、全体合唱の3部構成で実施され、ピアノステージでは誰もが聞いたことのある名曲や流行の曲の演奏があり、合唱ステージでは本学の混声合唱団が練習の成果を披露し、全体合唱では「川の流れのように」を来場者全員で合唱しました。最後の実行委員長による挨拶の後には来場者からのアンコールにピアノ演奏で応えるなど盛り上がりを見せました。

今回のサマーコンサートは、学生主導による初の試みでしたが、100名以上の来場者があり、好評のうちに終了しました。



「院内コンサートを終えて」

院内サマーコンサート実行委員
医学科第5学年 松田 安希

8月22日(火)、院内コンサートを無事終演することができました。

『滋賀医大でも学生主体の院内コンサートをやりたい!』と学生有志で実行委員会を結成。はじめは開催できるかもわからなかったこの企画。初めてのことで何もかもが手探りでした。開催が決まってからもハプニングの連続で、当日開演するまで不安と楽しみでいっぱいでしたが、蓋をあけてみれば、100部用意したプログラムは早々になくなり、アンコールまでいただく大盛況で、ほんとにほんとに院内コンサートをやってよかった!!と思いました。誰かを笑顔にしたり、ハッピーな気分になれる「音楽」って素晴らしい。

このコンサートは、ピアノステージ、合唱ステージ、全体合唱の三部で構成され、『患者さんに時間を忘れて音楽を楽しんでほしい!』という想いのもと、誰もがどこかで聞いたことがあるような曲をたくさん選曲しました。

最後の全体合唱、「川の流れのように」では、会場一体となって歌うことができ、大きな口をあけて歌っている患者さん、涙しながら歌ってくれている患者さんを見ながら胸がじんと熱くなりました。患者さんたちからは、「癒しの時間になった」「心がうるおった」「楽しいひと時でした」等たくさんのお声をいただきました。

『誰かのために演奏する、歌う』ことはまた特別なことで、このような機会をもてて出演者一同本当にしあわせでした。

今回このコンサートの開催にあたっては本当にたくさんの方にご協力・ご尽力していただき、感謝してもきれません。関わってくださったすべての方、本当にありがとうございました。

第69回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は山口大学を主幹校として8月に開催されました。来年度のさらなる活躍を期待したいと思います。

団体名	競技区分・成績	選手名
男子バレー部	【総合】 第3位	
ヨット部	【470級】 第4位	
	【コメディカル470級】 第5位	
	【総合】 第6位	
水泳部	【男子】 100m バタフライ 第3位 200m バタフライ 第4位 200m 自由形 第7位	吉田 耕輔 吉田 耕輔 古田 諒
	【女子】 50m 平泳ぎ 第4位 200m 個人メドレー 第6位 400m リレー 第8位	吉本 舞 吉本 舞 江川 千晶 若狭 香里 吉本 舞 松木 葵
	【コメディカル】 50m バタフライ 第5位 100m バタフライ 第3位	安居 亜起 安居 亜起
端艇部	【男子】 フォア 第5位	石合 誠 三上 温輝 山内 慎 北野 英 吉田 光 赤井 奎太 三瀬 巧馬
	ダブル シングル 第5位 第3位	堀川 陽平
	【女子】 新人クォドルプル 第3位	坂口 菜々子 加藤 穂乃香 奥原 あずさ 柴山 心 尾澤 かほる 池野 茜 寺尾 彩貴子
	ダブル シングル 第1位 第1位	高橋 実のり
陸上競技部	【男子】 800m 第7位 走り高跳び 第5位	池田 那祥 馬場 達也
	【女子】 ハンマー投げ 第1位	大沼 玲佳
柔道部	【男子団体】 第8位	
ゴルフ部	【男子】 団体 第7位	
	【女子】 団体 第5位 個人 第8位	田中 志歩
卓球部	【シングル】 第8位	山崎 智加

❖ 研究医養成コースのご案内 ❖

研究は案外身近で、おもしろい

■ ちょっとでも興味があれば、入門研究医コースに参加してみよう！

入門研究医コースは、基礎医学研究がどのようなものか情報を提供し、研究への興味を育てようとするもので、基本的に入出入り自由です。

第1学年で「基礎医学研究入門」を履修すると、自動的に入門研究医になりますし、講義を選択しなくてもコースに入れます。第1学年前期に数回行われるラボツアーに参加すれば、研究室の雰囲気がわかりますし、第1学年後期の必修授業（医学特論・医学・生命科学入門）では、講座で行われている詳細な研究内容を知ることができます。

複数の研究室をローテートすることも可能で、研究室の様々な活動に参加しながら、研究の基盤となる知識の習得や、研究の動向の理解に重点を置いた指導を受けられます。



■ 本格的に取り組むなら、登録研究医コースへ！



自分のやりたいことが定まってきたら、登録研究医にステップアップしましょう。第1学年から第5学年のいずれの時点でも登録可能で、年に数回面接による資格確認が行われます。

興味のある研究領域に応じて分子医科学・病理学・法医学・公衆衛生学の各専攻を選択し、自分の研究テーマをもって実際に研究活動に参加することになります。アドバイザーとして指名された基礎医学講座やセンターなどの教授・准教授と、本事業専任の特任助教とが、研究テーマの選び方から、実際の実験手技まで一から相談に乗ります。それぞれの講座のスタッフによる実験指導も受けられますので、効率的に研究を進めることができます。希望に応じて、複

数の講座をローテートしたり、連携大学である浜松医科大学や三重大学に出向いて、幅広い研究手法を身につけることも可能です。

登録研究医コースの期間は、学会や研究会への参加経費の補助も受けることができます。また、大学院の講義の一部を聴講することができ、大学院進学後には取得単位として認定されます。

詳しくは、研究医養成コースのホームページへ (<http://www.shiga-med.ac.jp/kenkyui/>)

■ 研究医養成コース（登録研究医コース）参加者の声

医学科第5学年 井上 拓也

所属研究室 社会医学講座（法医学部門）

指導教員 一杉 正仁 教授

所属学会 日本交通科学学会、日本リハビリテーション医学会、
日本医学写真学会

研究テーマ 脳卒中患者の自動車運転再開支援



Q 研究医養成コースに参加しようと考えたきっかけは何ですか？

私は第2年次後期に学士編入学しました。第2年次後期は学業が忙しく、研究に目を向ける余裕がなかったのですが、第3学年になり、友人の勧めで法医解剖の見学をさせて頂いたことが研究医養成コースに参加するきっかけでした。

Q 現在取り組まれていることを教えてください。

講義やクリニカルクラークシップの合間をぬって、法医解剖に立ち会わせて頂いています。法医解剖を行うに当たっては、基礎医学の中心となる解剖学や生理学の知識はもちろん必須なのですが、死因を正しく突き止めるためには臨床医学の知識も必要不可欠となります。さらに、亡くなった方の生活背景や、事件や事故であれば当時の状況も総合して死因を特定していく必要があります。また、滋賀県には医学部を持つ大学が本学しかないため、滋賀県内の法医解剖はすべて滋賀医科大学で行われています。法医解剖に立ち会わせて頂く度にその奥深さと社会的な重要性を痛感します。

また、私は本学に入学する以前は、理学療法士としてリハビリテーションの仕事に従事していました。このバックグラウンドを生かし、一杉先生が取り組まれている交通医学の一分野である、脳卒中患者の自動車運転再開支援に関する研究を行っています。この分野は臨床、研究共に欧米で先進的に取り組まれています。日本ではまだその歴史が浅く、今後積極的に発展させていく必要のある分野であると考えています。



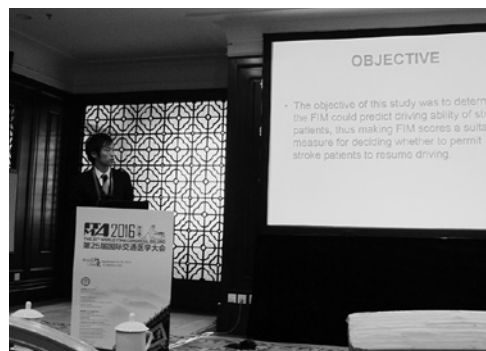
一杉教授と教室にて

Q 登録研究医コースに登録して良かったと思うことは？

学会に参加する際、経済的なサポートを受けられることを始め、最も良かったと思うことは研究を通し自ら学ぶことによって自分の見識を広げられることです。さらに、学会や論文などで研究成果を報告することは社会的にも価値のあることだと思います。私自身も一杉先生のご指導のもと、国内外で学会発表を行ったり、医学雑誌や書籍で研究成果を報告させて頂いたり大変やり甲斐を感じながら研究に取り組むことができています。学生の頃から研究に携わることができる研究医養成コースは、滋賀医科大学の大きな魅力の一つであると思います。

Q 参加を考えている後輩へ一言お願いします。

将来は臨床医になることを考えている人が大半だと思いますが、そのような人にとっても研究を通して学んだことは必ず臨床に生かせると思います。また、研究医養成コースに登録すると将来の選択肢を研究一筋に狭めてしまうと誤解する人がいますが、そのようなことはまったくありません。研究一筋という選択肢もあり、臨床と研究をバランス良くやっていくという選択肢もあり、研究のバックグラウンドを生かしてEBMを実践できる臨床医になるという選択肢もあります。是非この制度を活用して、自身の見識を広げ、将来の選択肢を広げて頂ければと思います。



国際学会にて

図書館からの
お知らせ
News from
the library

Library Book Bazaarを
開催しました!!



図書館では、若鮎祭の企画としてLibrary Book Bazaarを図書館前および図書館ラウンジにて10月28日(土)～29日(日)の2日間開催いたしました。2015年から2年ぶり4回目の開催になります。

Library Book Bazaarは、不要になった図書や雑誌を、無料でお譲りするものです。今年は両日ともあいにくの雨天となり天候には恵まれませんでした、たくさんの方々にお立ち寄りいただきました!



Library Book Bazaar の設営中です。
今年は何れだけ引き取っていただけるか
ドキドキです!



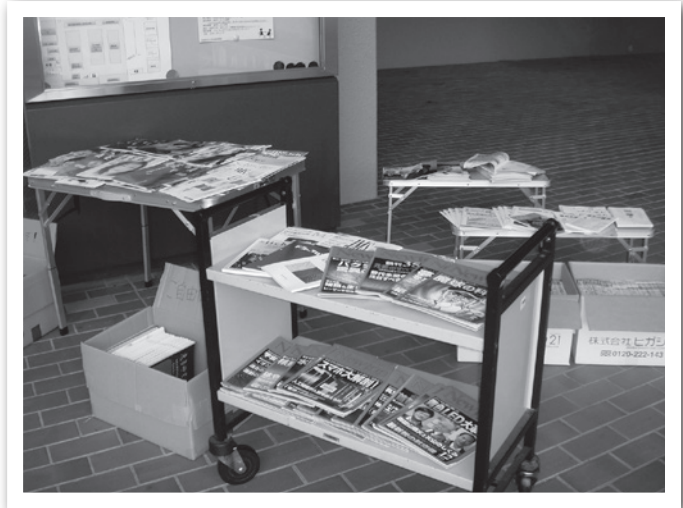
皆さん熱心に
ご覧になってくださいました!
掘り出し物はあったでしょうか。



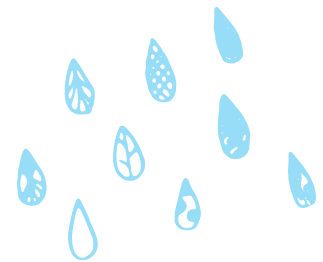
出品した資料は医学系の専門書中心になりましたが、本学の学生や教職員だけでなく、一般の方も熱心に吟味されていて、医療情報への関心の高さがうかがえました。

専門書だけでなく、AERAやNewton、日経サイエンスなど読み物としても楽しめる雑誌も数多くそろえることができ、多くの方々に興味を持っていただけたのではないかと思います。

毎年人気の雑誌たち。
AERAやNewton、日経サイエンスと
例年通りの顔ぶれと、
学術雑誌も少し出品いたしました。
Newtonは今年も完売(?)と
前回に引き続き根強い人気でした。



29日は、台風の影響で風雨がひどくなり
図書館ラウンジへ移動。
雨にも風にも負けずに2日間
なんとか開催できました。



また同時に、本学の「滋賀医科大学支援基金」へ
ご寄付をお願いいたしましたところ

総額 **5,961円** の寄付をいただきました。

たくさんのご協力を誠にありがとうございました。

出品した
1,912冊のうち、
2日間で
508冊
資料がお引き取り
いただきました！



JCHO
滋賀病院だより
News from JCHO
Shiga Hospital



外科部門の紹介



独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）滋賀病院 外科・手術部長

八木 俊和

（滋賀医科大学医学部医学科 8 期生・昭和63年卒）

独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）滋賀病院は2014年4月に以前の社会保険滋賀病院から独立行政法人へ移行した325床の公的病院です。当院はJR石山駅から京都方向へ徒歩約15分の位置にあります。当院の立地する大津市域は、滋賀医大を始めJR各駅に規模の大きな公的病院が存在し、滋賀県内で最も厳しい急性期病院激戦区であります。

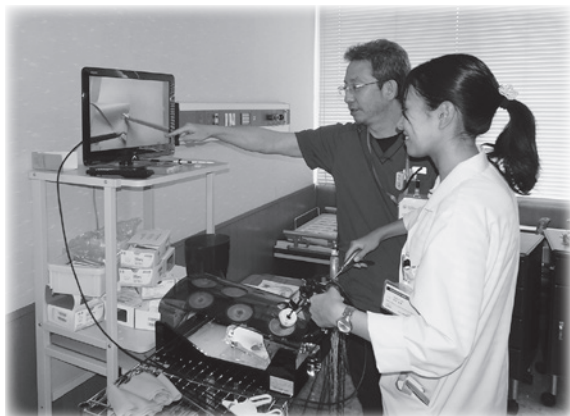
当院の外科は従来常勤外科医3人（時々4人）、常勤麻酔科医不在、という体制で診療を行ってききましたが、2015年に滋賀医大外科より来見院長が就任され、続いて外科医1名が赴任して来ました。昨年には女性乳腺外科医1名が地域医療教育拠点准教授として医大在籍の上で当院へ出向赴任しました。本年度は、先の外科医と交代で同拠点准教授が着任しました。以上により現在の外科常勤医は、院長以下6名となりました。これら全ての外科医が日本外科学会専門医を有し、サブスペシャリティとしての消化器外科学会専門医や乳腺外科学会専門医がそれぞれ専門領域の診療を行っています。各々に指導医資格もあり、当院は学会関連施設でもあります。加えて内視鏡外科技術認定医・肝胆膵外科学会高難度技術指導医等々、様々な認定資格を取得した医師が在籍しております。昨年度には念願であった常勤麻酔科医も1名着任し、ようやく病院規模に見合った体制になってきました。

次に当科の診療内容を紹介します。当科では、食道

癌・胃癌・大腸癌・肝胆膵疾患・乳癌・各種ヘルニア・肛門疾患等、いわゆる消化器・乳腺・一般外科領域の手術を行ってきました。昨年の実績（概算）はNational Clinical Database登録症例350例、内、全身麻酔症例200例でありました。手術内容ですが、大腸切除術・胆嚢摘出術・鼠径ヘルニア手術については、ほぼ全例を腹腔鏡下で行っています。胃癌手術は早期に限って鏡視下で行っていますが、実際は進行癌症例が多く標準手術の比率が高くなっています。肝切除術や膵胆道癌手術も適応を絞って安全に行っており、成績も悪くないと思っています。乳癌手術件数は驚きの伸びを見せていますがそれはいずれ乳腺外科医からご報告を。

さて、当院は一昨年より地域医療教育研究拠点として滋賀医大と提携しました。従来滋賀医大生第6学年が毎年数週間、臨床実習に来ていましたが、現在は新たに第5学年全員が実習に来ています。当科にも週3日は学生がいます。先述のとおり当科には2名の准教授が派遣され学生教育も行っているため、学生にはできるだけ手術に入って貰い、また、腹腔鏡手術ラボで楽しく実習して貰っています。

最後に地域医療の担い手として、我々はもっと手術をしなければいけない、若い先生もほしい、と感じています。皆さん、是非とも手術症例をご紹介下さい。宜しくお願い致します。



学生実習（ラボ）の様子



手術風景



循環器内科の紹介



独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）滋賀病院 循環器内科 部長

松井 俊樹

（滋賀医科大学大学院卒）

JCHO滋賀病院循環器内科は現在常勤医5名にて診療をおこなっています。常勤医はすべて日本循環器学会専門医でありまた個々に不整脈専門医、心血管インターベンション専門医、救急専門医資格を持った医師が在任しています。社会保険病院時代には2名で診療にあたっていた時もありましたが現在5名になり、ある程度は地域医療に貢献できる体制になったかと思っています。外来は月～金まで2診体制でおこなっており夜間、休日も待機制をしいて緊急の心臓カテーテル検査、他科からのコンサルトに対応できるようにしています。循環器病棟は50床のうち2床のCCUがありほとんどの急性期循環器内科疾患に対応しています。ただ高齢患者さんが多いこともあり肺炎、脳梗塞など幅広く内科疾患全般の診療も行っております。JCHO滋賀病院には県内でも有数の腎透析センターがあるので他病院と比較し透析患者さんを診療する機会も多いと感じています。糖尿病性の腎不全が増加していることもあり透析患者さんでの心血管疾患の合併率は高くまた動脈硬化、石灰化の度合いも強いので虚血性心疾患の診断、治療には積極的にかかわれるように心がけています。幸い部署ごとの垣根は低いので医師のみならず看護師さんや臨床工学士さんから直接コンサルトを受けることもあります。透析の虚血性心疾患の患者さんは重症下肢虚血も合併していることも多く、時には下肢切断を迫られる場合もありますが下肢切断の回避のために透析科、整形外科、フットケアスタッフとも連携しカテーテルによる血行再建治療を根気よく行っています。内シャント狭窄の症例についても当科でバスキュラーアクセスインターベンション治療（シャントPTA）を行うようにして当院で完結して治療が受けられるようにと考えています。ただ多枝冠動脈疾患、大動脈弁狭窄症患者さんでは内科的治療、カテーテル治療では対応できないこともあり大学の心臓血管外科にお願いしていますが常勤医が院内にいてくれたら度々思うことがあります。

また循環器の領域では2013年より条件付きでMRIの撮影可能なペースメーカーの植え込みが可能になりま

した。以前はペースメーカー植え込み患者においてはMRI検査は禁忌でしたがMRI対応ペースメーカーのおかげでより正確な診断が可能になりました。当院ではこれまでに22件（頭部11件、上腹部2件、下腹部1件、脊椎8件）の撮影を施行しましたがいずれもトラブルなく検査を終えています。

2015年5月からはリハビリ室の一角を「心リハゾーン」として自転車エルゴメーター5台・トレッドミル1台を配置し心血管リハビリテーションも開設しました。当初は入院患者さんだけでしたが高齢慢性心不全患者さんのため2015年7月からは外来でも継続して行えるようにしました。心血管リハビリを行うようになり患者さんと病院スタッフの距離が近くなりスタッフのモチベーションが上がった事や循環器医のみならず病棟看護師・外来看護師・理学療法士・作業療法士・事務クラークが参加するので業種間のコミュニケーションがスムーズになったと感じています。

最後に2016年4月より当院での滋賀医科大学医学科第5学年の臨床実習がはじまっていますがレクチャーや質問に答えながら教えることの難しさを再認識しています。学生の方には積極的にカテーテル検査にも入ってもらいたいと思っていますのでよろしく願います。



心臓カテーテル法
における諸検査



心大血管疾患リハビリテーション

インフォメーション

Information

平成29年度 大学院 学位授与式

平成29年10月2日（月）午前11時から管理棟3階の大会議室において挙行され、博士課程13名、論文博士5名、修士課程3名に学位記が授与されました。



- 博士（医学）（課程博士） 13名
- 博士（医学）（論文博士） 5名
- 修士（看護学） 3名

平成29年度 医学科第2年次後期学士編入学並びに 秋季大学院 入学宣誓式

告 辞

学 長 塩田 浩平

本日ここに、滋賀医科大学へ学士編入学される17名、ならびに大学院医学研究科へ入学される9名の皆さんを迎え、平成29年度滋賀医科大学医学科第2年次後期学士編入学および秋季大学院医学研究科入学宣誓式を挙行できますことを心からうれしく思います。

医学科学士編入学の皆さん、滋賀医科大学への御入学おめでとうございます。ご家族の方々にもお慶びを申し上げます。

滋賀医科大学医学科では、第1学年の4月に入学する定員100名の学生の他に、第2学年の秋学期に定員17名の編入学生の皆さんをお迎えしています。これは、多様な選抜を行うことによって複数の受験機会を提供すること、また、多様な人材を受け入れることにより大学と学生集団が活性化することを期待して実施しているものです。

皆さんは、これまでに文系・理系の様々な分野の勉強をされ、あるいは社会人としての経験を積まれる中で、医学・医療に関心を持ち、医師・医学研究者の道に歩むことを決意して、本学の学士編入学試験に合格されました。医学を志したその熱い思いを忘れることなく、目的意識を持続してこれから勉学に励み、友人とともに充実した学生生活を送っていただきたいとします。

滋賀医科大学では現在、医学教育カリキュラムの抜本的な改革を進めています。これまでのわが国の医学教育の内容では、近い将来、米国で臨床活動を行うための資格試験を受験することができなくなることから、本学においても今年度から、医学科の教育内容を国際基準に適合した内容に大きく変えました。例えば、5、6学年に行う臨床実習については、従来60週未満であ



ったものを67週間に、1割以上時間数を増やしました。また、その内容も、これまでのように先生の横について患者さんの診察を見学するような実習ではなく、学生自らが患者さんに接して実際に診察行為の一部を行う「参加型臨床実習（クリニカル・クラークシップ）」が求められることになりました。

本学では、こうした国際基準に合致する医学教育カリキュラムを整えた上で、公的な審査機関である「日本医学教育評価機構（JACME）」の審査を今から一か月後に受審します。この審査は、滋賀医科大学の卒業生が国際基準の医学教育を受け、世界に通用する知識と技能を備えている、という認定を取得するためのものですので、全学の教職員、在学生、卒業生有志の皆さんが総力を挙げて、現在鋭意準備を進めています。

こうした医学教育の改革に伴い、学生の授業時間、実習時間がこれまで以上に増えています。医学部での勉学は忙しく、内容も大変多いので、これからの4年半は皆さんにとって非常に多忙な学生生活となります。皆さん一人一人が心身の健康を保ち、悔いのない大学生活を送られることを願っています。

滋賀医科大学のスタッフは、質の高い医療を実践し、優れた医学研究を行うことによって医学医療の進歩に

貢献するため、日夜頑張っています。それと同時に、滋賀医科大学の学是に「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく」とあるように、本学は滋賀県を中心とした「地域」の医療を担うという大きな使命もっています。わが国では急速に高齢化が進んでおり、今後10～20年の間に日本の医療も大きく様変わりすることは想像に難くありません。「地域包括ケアシステム」を中心として、地域の医療機関や行政が一体となって、病人や高齢者を支えていくことになります。医師の仕事も今後は多様化し、病院、診療所、在宅診療など、活動の場が増えていきます。皆さんには、専門医としての高い能力とジェネラリストの能力が共に要求されることになるでしょう。これから4年半の勉強によってプロフェッショナルとしての確固たる能力を修得すると共に、医学以外の広い教養も身につけて、豊かな人間性と高い倫理観をもった医師となってください。

次に、平成29年度秋季大学院医学研究科博士課程に進学された7名と修士課程看護学専攻に入学された2名の皆さん、ご入学おめでとうございます。この中には、「先端医学研究者コース」に1名、博士課程教育リーディングプログラム「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」に3名の外国人の方が入学されました。本学の国際化にとって大変うれしいことであります。

大学院に進学された皆さんは、これからの2年間または4年間、看護学と医学のそれぞれの分野で研究を行うことになります。ぜひ自ら興味のある研究テーマを見つけ、すばらしい研究成果を挙げてください。医学医療が加速度的に進歩し、これまで不明であった疾

患のメカニズムが解明されたり、画期的な医薬品や機器が開発されたという報告が続いています。その一方で、まだまだ未解明の課題が沢山残っています。皆さんにはぜひ大きな課題に挑戦して、医学と看護学の発展に寄与していただきたいと願っています。

また、わが国では高齢化が急速に進展し、アジア各国などでもがん・脳卒中・心臓疾患などの生活習慣病の問題が重要になってきています。そのために、社会医学的研究が大変重要になってきています。今回、バングラデシュとベトナムからの3名の方が加わられる博士課程リーディングプログラム「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」は、人類がこうした非感染性疾患の課題を克服するためのグローバルリーダーを育成することを目的とした大学院コースです。

そのほか、滋賀医科大学では、アルツハイマー病を中心とした神経難病研究、サルを用いた医学生物学的研究、癌治療研究などを重点研究の柱として推進すると共に、各研究者の発想に基づく多様な研究を推進しています。大学院の数期間は、自らの興味とアイデアに基づいて自由に発想し、研究に集中できる貴重な時間です。その中で研究者としての素養と能力を修得するとともに、正しい研究態度、高い倫理観を身につけてください。

皆さんの大学院生活が充実して実り多いものになることを心から願っています。

本日の滋賀医科大学へのご入学を心からお祝いし、すべての皆さんのご健康と今後のご活躍を祈念して、式辞といたします。

平成29年10月2日



平成29年度 医学科第2年次後期学士編入学並びに 秋季大学院 入学宣誓式

平成29年10月2日（月）に管理棟3階の大会議室で挙行し、医学科学生17名、大学院生9名（博士課程：7名、修士課程：2名）の新入生を迎えました。

第2年次後期学士編入学



■第2年次後期学士編入学 17名

秋季大学院入学



■秋季大学院博士課程入学 7名

第43回解剖体慰霊式

10月26日(木) 午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員及び教職員・学生合わせて約500名が参列し、厳かに第43回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。このたびは、系統解剖45霊、病理解剖37霊、法医解剖133霊の計215霊を新たにお祀りし、御霊(みたま)のご冥福をお祈りしました。

慰霊式では、最初に参列者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、塩田学長による慰霊の辞、学生代表の慰霊の詞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞の後、参列者全員が献花を行いました。

最後にご遺族代表の挨拶に続き、本学を代表して社会医学講座(法医学部門)一杉教授から挨拶があり、閉式となりました。



学長献辞の様子



学生献花の様子

平成29年度 研究動物慰霊式

10月31日(火) 午後3時より、本学研究動物慰霊碑前(体育館の南西)において平成29年度研究動物慰霊式を執り行いました。

晴天に恵まれ、慰霊式には学長、理事を始め131名が参列し、全員で黙祷を行った後、動物生命科学研究センター長の小笠原理事、利用者会議副議長の扇田教授より慰霊の辞が述べられました。

その後、出席者全員による献花が行われ、過去1年間に実験に供された動物の御霊の冥福を祈りました。



黙とうを捧げる参列者



小笠原センター長による慰霊の辞

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

2018年1月

理念

滋賀医科大学は、地域の特徴を生かしつつ、特色ある医学・看護学の教育・研究により、信頼される医療人を育成すること、さらに、世界に情報を発信する研究者を養成することにより、人類の健康、医療、福祉の向上と発展に貢献する。

目的と使命

[滋賀医科大学]

滋賀医科大学は、地域の特徴を生かしつつ、特色ある教育・研究により、信頼される医療人の育成及び世界に情報を発信する研究者を養成することを目的とし、もって人類の健康、医療、福祉の向上と発展に貢献することを使命とする。

（国立大学法人滋賀医科大学 学則第1条を一部修正）

[滋賀医科大学大学院]

大学院は、医学及び看護学の領域において、優れた研究者及び高度な知識と技術をもつ専門家を養成することを目的とし、もって、医学及び看護学の進歩と社会福祉の向上に寄与することを使命とする。

（国立大学法人滋賀医科大学 大学院学則第2条より抜粋）

教育理念

豊かな教養と高い専門的知識及び技能を授けるとともに、確固たる倫理観を備え、科学的探究心を有する医療人及び研究者を養成する。

教育目標

- 1) 課題探求、問題解決型学習を通して、適切な判断力と考察する能力を養う。
- 2) 豊かな教養を身につけ、医療人としての高い倫理観を養う。
- 3) コミュニケーション能力を持ち、チーム医療を実践する協調性を培う。
- 4) 参加型臨床（地）実習を通して、基本的な臨床能力を習得する。
- 5) 国際交流に参加しうる幅広い視野と能力を身につける。

古本募金「きしゃぽん」の 回収BOXを設置

本学附属図書館の正面入口左側に、古本募金「きしゃぽん」の回収BOXを設置しました。

古本募金「きしゃぽん」とは、読み終えた本・DVD等をご提供いただき、その査定換金額を本学に寄附する取り組みです。寄附金は教育研究活動等の充実、学生の修学支援などに役立っています。

皆様のご協力をお願いします。



滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。

「中心に向かって、外からさざ波の波動—これは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動—これは人々の期待に返す答えである。」